

「雨の中の猫」の中の三毛猫

浅 若 裕 彦

序

動物行動学者の Desmond Morris によると、「芸術家は猫を好み、兵士は犬を好む」という。¹⁾ 文学者にも猫好きは多い。アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) も猫が好きだったことはよく知られている。ヘミングウェイは子供のころから猫に限らず動物が好きであったが、²⁾ 猫はおそらく彼にとって最も身近な動物であっただろう。彼が後半生の20年ほどを過ごした、キューバのハバナ郊外にある、フィンカ・ビヒア (Finca Vigia) と呼ばれる彼の居宅には、50数匹もの猫がいたという。彼の作品にも猫はたびたび登場するが、タイトルに「猫」ということばが入っている作品は、「雨の中の猫」³⁾ “Cat in the Rain” という短編だけである。⁴⁾

この作品では、最後の場面で、大きな三毛猫がホテルのメイドに抱えられて登場するのだが、今村楯夫はこの三毛猫がオスであるかもしれないと述べている。⁵⁾ 三毛猫は通常メスである。しかし、ごく稀にオスの三毛猫が生まれることがある。オスの三毛猫は、その珍しさゆえ、幸運を招くものとして珍重されることもあれば、逆に魔物として忌み嫌われることもあったというが、⁶⁾ 果たして「雨の中の猫」に登場する三毛猫は本当にオスなのだろうか。本稿では、この三毛猫の性別に関わる問題、すなわち、この三毛猫はオスであると考えることができるのか、また、オスだと考えることは、作品を解釈する上でどんな意味を持つのか、ということについて考えていきたい。

1

「雨の中の猫」は非常に短い作品であるが、“iceberg principle”（「氷山の原理」）として知られている、ヘミングウェイ独自の行間に多くの含みを持たせる語り口ゆえ、読者はそれぞれの解釈を迫られ、いろいろなことを言いたい気分⁷⁾にさせられる。事実多くの批評家がこの作品を取り上げて、いろいろな解釈を行っている。その多くは、物語の冒頭に登場する猫と、最後に登場する猫が同一の猫なのか、それとも違う猫なのかということに関連したものである。これは作品の解釈に関わる重要な問題なので、猫の性別について論じる前に、まずはこの問題について整理しておきたい。

初めに作品のあらすじを記す。イタリアのとあるホテルにアメリカ人の夫婦が滞在している。彼らの部屋は二階で海に面している。雨の日に妻は部屋の窓から外を眺めていて、窓の真下の緑色のテーブルの下に、雨を避けようとずくまっている一匹の猫を見つける。妻は「あの子猫をつかまえてくる」と言って外へ出て行く。ホテルのメイドが傘を持ってついてきてくれる。ホテルの主人に好感を持っている妻は、彼がメイドをよこしてくれたのだろうと考える。妻はメイドとともに猫のいたところに行ってみるが、猫は見つからない。仕方なく部屋に戻った妻は、猫のことや自分の髪型のことなどについてしきりに夫のジョージ（George）に話しかけるが、ジョージはベッドの上で読書を続けていて、妻の話に耳を傾けようとしない。そこへメイドが大きな三毛猫を抱えてやってくる。メイドは「主人からこれを奥様にお届けするように申しつかりましたのですが。」と言う。話はここで終わり、メイドが連れてきた猫に対して、夫や妻がどう反応したかは読者の想像に任される。

妻が窓から見た猫と、最後にメイドが抱えてきた猫は、果たして同じ猫なのであろうか、それとも違う猫なのであろうか。妻が猫を見つける場面は、次のように書かれている。

The American wife stood at the window looking out. Outside right under their window a cat was crouched under one of the dripping green tables. The cat was trying to make herself so compact that she would not be dripped on.

“I’m going down and get that kitty,” the American wife said. (129)⁸⁾

アメリカ人の妻は窓辺に立って外を見ていた。その窓の真下の、雨のしずくが滴り落ちている緑色のテーブルの下に猫が一匹うずくまっていた。猫は雫がかからないように身を縮めようとしていた。

「下へ行ってあの子猫を捕まえてくるわ。」とアメリカ人の妻は言った。

妻は自分が見つけた猫を「子猫」「kitty」という語を使って呼んでいる。これに対し、最後の場面に登場する猫は、「大きな三毛猫」である。

In the doorway stood the maid. She held a big tortoise-shell cat pressed tight against her and swung down against her body. (131)

戸口にメイドが立っていた。彼女は大きな三毛猫をぶらさげるようにしてしっかりと抱きかかえていた。

妻が窓から見つけた猫が「子猫」で、最後に連れてこられた猫が「大きな三毛猫」であるならば、議論するまでもなく、違う猫であることは明らかである。Carlos Baker のように、特に根拠を示すことなく同じ猫だと考える批評家⁹⁾もいるが、これはいささか不注意な読み方であると言わざるを得ない。しかし逆に違う猫であると言い切れるわけでもない。最後の場面でメイドが連れてきた猫が「大きな三毛猫」であることは疑いないが、問題は、最初に妻が見た猫が本当に「子猫」であったかということである。

妻の台詞の中では「子猫」「kitty」という語が使われているが、地の文では「猫」「cat」と書かれている。「kitty」という語は作品中に合計7回出てく

るが、斎藤兆史が指摘しているように、それはすべて妻の台詞の中である。¹⁰⁾つまり、語り手は「子猫」がいたということを、自分のことばで保証していないのである。さらに、妻は明るいところで間近に猫を見たわけではない。妻が猫を見たときの状況、すなわち、雨の中、テーブルの下で身を縮めている猫を、二階の窓から見た、ということなどを考え合わせると、本当に「子猫」であったかは、少々疑わしく感じられる。妻が窓から見た猫がどういう猫か必ずしもはっきりしないということになれば、それが「大きな三毛猫」であったという可能性もないとは言えなくなる。つまり、同一の猫ではないと言い切ることもできないのである。

ただ、言えることは、見間違いだった可能性は残るとしても、妻は「子猫」を見たと思い、「子猫」が欲しいと思ったということ、そして最後にメイドが部屋に持ってきたのは、それとは違う「大きな三毛猫」であったということである。つまり、妻は欲しいと思っていたものが手に入ってハッピーエンドになるのではなく、妻の期待は裏切られて話が終わる、というのが筆者の解釈である。¹¹⁾

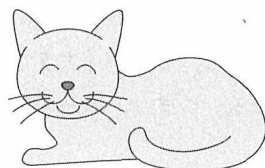
2

さて、最後の場面に登場する「大きな三毛猫」であるが、今村の言うように、オスであると考えすることはできるのだろうか。先に述べたように、三毛猫は通常メスである。それは三毛猫の毛色の発現に、性別を決定する性染色体が関係していることに由来する。

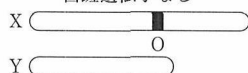
生物の性別は、環境によって決定される場合と遺伝子によって決定される場合がある。遺伝子によって決定される場合には、その遺伝情報を持った性染色体というものの組み合わせによって性が決まる。性染色体は、メスが同型、オスが異型の性染色体を持つ場合、オスとメスが共通して持つものをX染色体、オスだけがもつものをY染色体と呼ぶ。逆に鳥類のようにオスが同型、メスが異型の性染色体を持つ場合には、混乱を避けるため、便宜的にオスとメスが共通して持つものをZ染色体、メスだけが持つものをW染色体と

呼ぶ。人間や猫などの哺乳類が持つのはX染色体とY染色体であり、XXと¹²⁾いう組み合わせではメスになり、XYという組み合わせではオスになる。

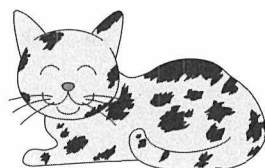
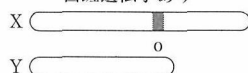
三毛猫になるのは茶、黒、白の三色の斑を発現させる遺伝子を持つ猫である。岩崎るりはは、図1にあるように、茶色の斑を発現させる遺伝子を赤斑遺伝子、黒い斑を発現させる遺伝子を黒斑遺伝子、白い斑を発現させる遺伝



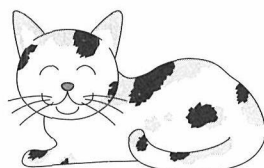
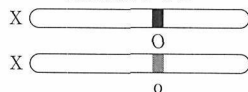
オス 赤猫 (毛色…赤)
白斑遺伝子なし



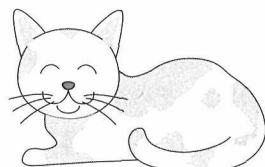
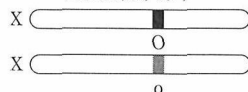
オス 黒白斑 (毛色…黒, 白斑)
白斑遺伝子あり



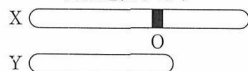
メス 二毛 (毛色…赤, 黒斑)
白斑遺伝子なし



メス 三毛 (毛色…赤, 黒, 白斑)
白斑遺伝子あり



オス 赤白斑 (毛色…赤, 白斑)
白斑遺伝子あり



O…赤斑遺伝子 (オレンジ遺伝子)
o…黒斑遺伝子 (非オレンジ遺伝子)
S…白斑遺伝子

子を白斑遺伝子と呼んでいる。このうち白斑遺伝子は常染色体の上であり、性別に関係なく持っているものと持っていないものがある。黒斑遺伝子と赤斑遺伝子は性染色体のうちX染色体の上にある。黒斑遺伝子と赤斑遺伝子の両方が一つの染色体の上にあることはないので、黒い毛と茶色の毛の両方が一つの個体に発現するためには、X染色体が二つ必要である。そのためX染色体を一つしか持たないオスには黒い毛と茶色の毛の両方が同時に発現することはなく、XXの組み合わせの染色体を持つメスにしか三毛猫は生まれないことになる。¹⁴⁾

しかし染色体異常により、ごく稀にオスの三毛猫が生まれることがあるという。岩崎は次のように述べている。

これは精子や卵子を作る減数分裂を行う際に、性染色体のコピーや分配がうまくいかず、本来XYという性染色体がXXYになるためだといわれています。このようなケースではオスであっても二本のX染色体を持つことができるため、メス猫と同様に三色の毛色になるのです。しかし、こうした染色体異常はきわめて稀にしか起きないため、オスの三毛猫はほとんどいないというわけです。¹⁵⁾

つまり、何らかの理由で染色体の異常が起こり、XXYという組み合わせの性染色体を持ち、なおかつその二本のX染色体のうち、一本に赤斑遺伝子、もう一本に黒斑遺伝子が存在している場合にのみ、オスの三毛猫が生まれることになるのである。

Desmond Morrisによると、オスの三毛猫の生まれる確率は200分の1だという。¹⁶⁾「雨の中の猫」に出てくる三毛猫が、このような珍しいオスであると考えべき理由はあるだろうか。今村は次のように述べている。

大きな三毛猫の性別はわからない。(遺伝学上、三毛猫の雄はまれであるとされているが)「大きな猫」としたところに、言外に「雄猫」の意

を含めていたのかもしれない。¹⁷⁾

ごく稀にしか生まれないオスの三毛猫が、実際に大きいのかは分からないが、“big”「大きい」という語をヘミングウェイが男性性を示すために使っているという指摘がある。

さらに [[「ミシガンの北で」] の] 第一パラグラフの「ジムは背が低く色黒で大きな髭と大きな手をしていた」(八一)における‘big mustaches and big hands’の‘big’の繰り返しは、‘like’の繰り返しと同様に重要だと思われる。ジムが射止めた鹿は‘a big buck’であり、その鹿を載せてきた馬車は‘big elm’の下に停まり、ジムが持ち上げてウイスキーを飲む酒壇は‘big jug’であり、ジムにもウイスキーの‘big shot’が注がれ、乾杯のとき“*That damn big buck, Jimmy,*”とD・J・スミスはいい、リズの膝に置かれたジムの手が‘so big’とりズに感じられ、ほとんどレイプに近い形でセックスしたときリズは“*Oh, it's so big and it hurts so.*”と叫ぶ。‘big’はこうして最後に男性性(器)へと収斂する。最初の‘big’な髭と‘big’な手はいかにも男らしい男を示す性的換喩に他ならなかったのだ。(「雨の中の猫」[一九二五]のアメリカ人の若い妻が「好き」だというイタリア人のホテル支配人も「大きな手」をしている。¹⁸⁾)

“big”という形容詞が使われているというだけで三毛猫がオスであると断じるわけにはいかないが、そこに男性性が暗示されているという読み方は可能であるかもしれない。最初に妻が窓から見た猫については、“*The cat was trying to make herself so compact that she would not be dripped on.*” (129, イタリックは筆者)と、“*herself*”や“*she*”といった女性形の代名詞が使われており、今村が指摘しているように、ここには妻の猫に対する自己投影を読み取ることができる。¹⁹⁾そのことを考え合わせると、“big”という語は、男性性を暗示することによって、最後にメイドが連れてきた猫が、妻の期待して

いたものとは違うということを強調するはたらきをしていると言えるかもしれない。

Paul Smith も最後に登場する三毛猫はオスであると考えている。

“Cat in the Rain” differs from “Out of Season” in beginning with a paragraph describing the rain-swept square, and in ending with a brief ironic twist when the maid enters the room with a gift from the padrone, a male tortoise-shell cat, as *sterile* an animal as the spawning trout are fecund in “Out of Season.” (イタリックは筆者)²⁰⁾

「雨の中の猫」が「季節はずれ」と違う点は、雨に洗われた広場を描写するパラグラフで始まることと、最後に短い皮肉な急展開が起こって話が終わることである。最後の場面で、メイドはホテルの主人からの贈り物の、オスの三毛猫を持って部屋に入ってくる。「季節はずれ」の産卵するマスは多産であるが、オスの三毛猫は生殖能力のない動物である。

ここで Smith は、メイドが連れてくる三毛猫はオスであると断じているが、その理由については説明していない。しかし、“sterile”「生殖能力のない」という語は、重要な示唆を与えてくれる。

先に述べたように、オスの三毛猫は性染色体の異常によって生まれてくるものなので、ただ単に珍しいというだけでなく、普通のオスとは異なる点があり、生殖能力も持たないのである。Desmond Morris は次のように述べている。

It does, however, have a problem because its masculinity leaves a lot to be desired. To start with, it is sterile. Also, its behavior is extremely odd. It acts like a masculinized female rather than a true male.²¹⁾

しかしこういう猫には問題がある。そのオスらしさに欠けている点が多いからだ。まず第一に、生殖能力がない。また、その行動も非常に奇妙

である。本もののオスというよりはオス化したメスのようにふるまう。

このことを踏まえた上で、最後に登場する「大きな三毛猫」がオスであるかもしれないと考えると、物語の最後に大きな皮肉が隠されているような気がしてならない。

実はヘミングウェイは、「雨の中の猫」のアメリカ人の妻について、子供がほしいと願っているが妊娠できないでいる女性という人物設定をしていたようで、そのことは今村が指摘しているように、ヘミングウェイが、友人で作家のF.スコット・フィッツジェラルド (Francis Scott Key Fitzgerald)²²⁾に宛てた手紙から窺うことができる。

Cat in the Rain wasnt [sic] about Hadley. I know that you and Zelda always thought it was. When I wrote that we were at Rapallo but Hadley was 4 months pregnant with Bumby Hadley never made a speech in her life about wanting a baby because she had been told various things by her doctor and I'd—no use going into all that.²³⁾

雨の中の猫はハドレーのことを書いたのではない。君とゼルダがいつもそう考えていたことは分かっている。あれを書いたとき私たちはラパルロにいたが、ハドレーは妊娠四ヶ月で、お腹にはバンビがいたんだ…ハドレーは一度も赤ん坊が欲しいなんて言ったことはなかった。医者にいろいろなことを言われていたし、私も…こんなことをいちいち説明しても仕方ないか。

ハドレーというのはヘミングウェイの最初の妻で、ゼルダというのはフィッツジェラルドの妻である。また、バンビというのはハドレーとの間にできた息子の愛称である。この手紙の中でヘミングウェイは、「雨の中の猫」のアメリカ人の妻のモデルが自分の妻のハドレーではないと主張し、その根拠として、この作品の執筆時にハドレーが妊娠していたことや、ハドレーが子供

を欲しいとは言っていないかったことをあげている。ヘミングウェイがこう主張しているからといって、ハドレーがアメリカ人の妻のモデルではなかったと断定することはできない。作者が自分や自分の作品について正直であるとは限らないからである。しかし、ヘミングウェイは、ハドレーが妊娠していたことや、子供を欲しいと言っていないかったことが、彼女がモデルであるという説を否定する根拠になると考えていたわけで、そこから、彼がアメリカ人の妻をどういう人物として描こうとしていたかを知ることができる。つまり、ヘミングウェイは、この作品のアメリカ人の妻を、子供を欲しがっているが、その願いがかなえられずにいる女性として認識していることがこの手紙から分かるのである。

アメリカ人の妻が「子猫」に執着するのは、今村が指摘しているとおり、「子猫」が、彼女の欲しがっている赤ん坊の代償となっているからであろう。²⁴⁾しかし最後に彼女の元に届けられるのは、何度も述べているように、「子猫」ではなく「大きな三毛猫」である。この三毛猫がもしオスだとしたらどうであろうか。そこには、彼女の失望感が描かれているだけでなく、子供が欲しいのに持つことができないでいる女性のところに、子供を残す能力のない猫が連れてこられるという、大きな皮肉がこめられているように思われるのである。

結び

「雨の中の猫」には、二十世紀を代表する詩人であるT. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot) の『荒地』(*The Waste Land*) からの影響が見られるという。今村によると、ヘミングウェイは、イタリアのラバルロに滞在中、友人で詩人のエズラ・パウンド (Ezra Pound) から『荒地』を借り受け、そのパロディ詩を書いている。そこには「大きな猫」と「小さな猫」が登場しているのだが、それが一つの下敷きとなって、「雨の中の猫」という短編へと発展したという。²⁵⁾そして今村は、『荒地』と「雨の中の猫」の共通点として、どちらにも、「不毛」が描かれていることを指摘している。

エリオットの描く性は、どれも淫売の性に似て、行為の後に不毛なる気配が広がる。ヘミングウェイがここに描く男女には性はない。少なくとも描かれていない。²⁶⁾そして、不毛だ。

この「不毛」という言葉こそ、まさに生殖能力のないオスの三毛猫から連想される言葉ではないだろうか。

ヘミングウェイが、この作品の最後に登場する「大きな三毛猫」を、オス猫として意識して書いたかどうかは定かではない。「大きな」(“big”)という形容詞に男性性を感じることができるとしても、それだけで、オス猫だと断定することは不可能であると思われる。しかし、ヘミングウェイが信奉していた、いわゆる“iceberg principle”に従って大胆な省略が施されていると考えるならば、最後にオスの三毛猫が「不毛」の象徴として登場するという解釈も、十分ありうるのではないだろうか。

* 本稿は、2006年10月20日に開かれた大谷学会研究発表会での口頭発表原稿を加筆修正したものである。

註

- 1) Desmond Morris, *Illustrated Catwatching* (London: Ebury Press, 1995), p. 7.
- 2) Carlene Fredericka Brennen, *Hemingway's Cats: An Illustrated Biography* (Sarasota, Florida: Pineapple Press, 2005), pp. 1-2.
- 3) コロナ・ブックス編集部『作家の猫』(平凡社, 2006), p. 66.
- 4) 今村楯夫『ヘミングウェイと猫と女たち』(新潮社, 1990), p. 97.
- 5) 今村, p. 137.
- 6) 平岩米吉『猫の歴史と奇話』(築地書館, 1992), pp. 128-131.
- 7) ヘミングウェイは、*Death in the Afternoon* の中で、次のように述べている。

“If a writer of prose knows enough about what he is writing about he may omit things that he knows and the reader, if the writer is writing truly enough, will have a feeling of those things as strongly as though the writer had stated them. The dignity of movement of an ice-berg is due to only one-eighth of it being above water. A writer who omits things because he does not know them only makes hollow places in his writings.”

Charles M. Oliver, *Ernest Hemingway A to Z: The Essential Reference to the Life*

- and Work* (New York: Facts on File, 1999), p. 322.
- 8) Ernest Hemingway, "Cat in the Rain," *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway* (New York: Simon & Schuster, 1998), p. 129. 以下、この作品からの引用はすべてこの版により、ページ数は本文中に示す。
 - 9) Carlos Baker, *Hemingway: The writer as Artist* (Princeton: Princeton University Press, 1952), pp. 135-136.
 - 10) 斎藤兆史「テキストと文体」川本皓嗣・小林康夫編『文学の方法』（東京大学出版会, 1996）, pp. 68-69.
 - 11) 浅若裕彦「『雨の中の猫』の中の猫」『西洋文学研究』第19号（1998）, pp. 42-56 参照。
 - 12) 八杉龍一他編『岩波生物学辞典』第4版（岩波書店, 1996）, p. 736, p. 748. しかし、ごく稀にはXY型の性染色体を持った女性や、XX型の性染色体を持った男性も存在する。これは、減数分裂によって精子が作られるときに、性決定の鍵を握るSRY遺伝子（Sex determining Y）が、本来あるべきY染色体からX染色体に移ってしまうことなどによって起こる。田幡憲一他編『日常の生物事典』（東京堂出版, 1998）, pp. 283-285 参照。
 - 13) 岩崎るりは『猫のなるほど不思議学』（講談社, 2006）, p. 223.
 - 14) 岩崎, pp. 220-224.
 - 15) 岩崎, p. 225.
 - 16) Desmond Morris, *Catlore* (New York: Crown Publishers, 1988), p. 92.
 - 17) 今村, p. 137.
 - 18) 武藤脩二「『ミシガンの北で』—女性文化と男性文化の衝突」日下洋右編『ヘミングウェイの時代 短編小説を読む』（彩流社, 1999）, pp. 12-13.
 - 19) 今村, p. 131.
 - 20) Paul Smith, "1924: Hemingway's Luggage and the Miraculous Year," *The Cambridge Companion to Hemingway*, ed. Scott Donaldson (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), p. 44.
 - 21) Morris, *Catlore*, p. 93.
 - 22) 今村, pp. 120-121.
 - 23) Ernest Hemingway, *Ernest Hemingway: Selected Letters 1917-1961*, ed. Carlos Baker (New York: Charles Scribner's Sons, 2003), p. 180.
 - 24) 今村, p. 130.
 - 25) 今村, pp. 108-110.
 - 26) 今村, p. 137.

(本学准教授 英文学・文体論)

<キーワード> 性別, 生殖能力, 不毛